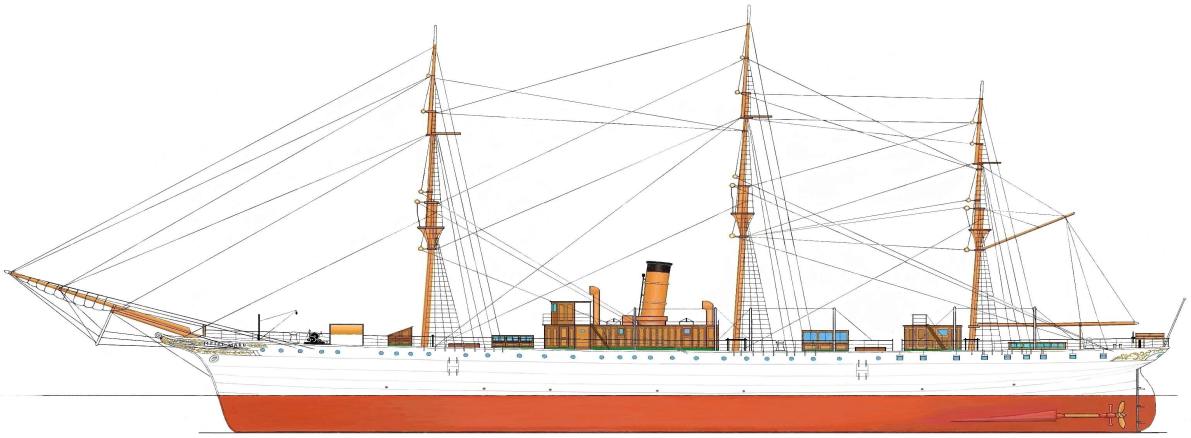
Ocean

海洋塾機関誌第4号



平成28年7月11日

特定非営利活動法人 日本海洋塾

日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§平成２７年度活動報告 及び 平成28年度事業計画§　理事長　松﨑光男

Ⅰ　平成２７年度事業環境

平成２７年度は、長年の念願であった「明治丸」の修復工事が平成２７年３月末に一応完了し、４月から本船の管理が大学に移り、７月１９日の修復工事竣工披露式と、翌２０日「海の日」の、臨時の一般公開の後、夏期の準備期間を経て、１０月からの明治丸海事ミュージアムの特別展示「船が開く明治～商船教育１４０年記念展示～」の開催に合わせて、甲板上の一般公開が開始され、１１月０１日には商船学校創立１４０周年を記念した行事が行われ、同時に「明治丸」の船内一般公開も始まりました。

然し乍ら、修復工事が完工したとは云え、「明治丸」は、塗装の剥がれや甲板上構造物の水漏れ等々、至急手直しを必要とする部分が多く、既に、一般公開の際にも見学者から色々ご指摘を受ける状況となり、これらの問題箇所について、大学と施工業者との間で「補償工事」として修復に関する交渉が行われ、平成２８年４月～５月に手直し工事が行われることになりました。

一方で、懸案であった「明治丸記念館」が、当初の計画規模を大幅に縮小しながらも、平成２８年３月末に完成しました。今後の活用が期待されます。

この間、業務量の増加に対処する為、平成２７年２月に辞任した谷山理事の替りに、７月より理事１名（澤間 理事）を選任しました。

平成２８年３月末現在の会員数は、正会員２２名、一般会員１９名、賛助会員１名、合計４２名となっております。

Ⅱ　平成２７年度事業実施内容

上記のような事業環境の下、平成２７年度は、会員皆様のご協力を得て以下のような活動を行いました。[（　　）内は定款上の事業区分]

1. ホームページの、更新、拡充を行うとともに、会員相互の交流の場として　機関誌「Ocean」を発行（創刊号～３号）しました。　（海事思想啓発事業）
2. 平成２７年１０月３１日に「プラネタリウム見学会」を海事普及会と共催（参加者３０名）、当塾はプラネタリウム、「明治丸」の見学後、見学に訪れた中・高生を主たる対象として「天文学と航海学のつながり」と題し、六分儀の実物を触らせるなどしながら、澤間理事がユニークな講演を行いました。（海事意識教育事業）
3. 会員勧誘の一助とすべく、海洋会・越中島支部の業務を受託しました。
   支部業務の流れを整理し、准員及び卒業生に関する名簿データの整備を行いました。　また、平成２８年３月には「（越中島）支部だより」約 1,800 通の発送業務を行いました。（海事意識教育事業）
4. 「江東区観光協会」（江東区が設立）との連携で、「深川さくらまつり」の期間

中に江東区観光協会が実施する「まちあるきツアー」（「明治丸」見学と桜めぐり）に協力することとなり、当塾は、ツアーに関する大学と「江東区観光協会」の協議を斡旋し、平成２８年２月２７日には「江東区文化観光ガイド」への「明治丸及び大学内史跡」に関する研修会を実施しました。（海事意識教育事業）

5. 平成２７年末に向けた「明治丸」のライトアップを大学側と協議して実現。　工事業者の手配、及び、照明器具の選択・設置について協力し、平成２７年１２月２１日から２５日までの５日間、夕方５時から夜９時までの点灯管理、事後の照明器具撤収、収納作業、等を行いました。
   更に、卒業式や、「深川さくらまつり」に合わせて、平成２８年３月２５日から４月３日の１０日間も同様にライトアップを行いました。（利活用促進事業）
6. 明治丸の保全作業への協力に向け、大学と鋭意協議の結果、本年度は「中甲板以下の船内・艙内清掃、艙内一部機器の清掃・整備」について大学から作業を請負い、平成２７年１１月２４日から作業を開始し、平成２８年３月末まで、協定した作業計画に従って実施しました。
   更に、上記「清掃・整備」作業の一環として、一般会員の参加（延８名）を得て、主として中甲板の「船内大掃除」を、平成２７年１２月２１・２２日の二日間に亘って実施、特にランプシェードの清掃など、普段手の届かない細かい箇所についての清掃・手入れを行いました。（整備保全事業）
7. 「寮歌を歌う会」、「修復工事竣工披露式」、「海の日」、「創立１４０周年記念式典」等の一連のイベントに合わせて、「寮歌の CD」及び「創立１４０周年・明治丸修復工事完成記念の缶バッジ」を作製し販売を行い、順調に在庫を減らしています。（物品販売事業）

Ⅲ　平成２８年度事業環境

平成２８年度は、修復工事が完成した「明治丸」、トイレ改修やエレベータの新設などの改装工事が終った「百周年記念資料館」、更に、新設の「明治丸記念館」、等の諸設備が整備され、それら諸施設の、より一層の利用・活用が求められる環境が整いました。

当塾としましては、両資料館内の展示物、展示方法、等々、利用・活用に関する各種提言を積極的に行い、「明治丸海事ミュージアム」との協力関係を一層強化し、事業を拡充していく必要があります。　また、「明治丸」につきましては、当面は、平成２７年度と同様の「上甲板甲板室内部、中甲板、下艙の清掃、及び、機器の清掃・整備」を請負ことになりますが、引き続き「明治丸」全般の保全、維持・管理、利用・活用、への協力度合いを一層深めるべく、大学側と協調していく所存であります。

一方、一般市民に対する海事思想の普及に関しましては、学内の「海事普及会」、

外部の「観光協会」等の各種団体との協力関係を一層発展させ、色々な事業を展開させる必要があると考えております。

事業活性化に向けて平成２８年４月より理事１名（尾身理事）を増員し、業務量の増加に対処することとしました。

当塾の活動の更なる活性化に向けて、会員皆様のご提案、ご協力、ご参加を切に希望致します。

Ⅳ　平成２８年度事業計画

上記の如き状況に鑑み、平成２８年度は活動の機会を一層広げるべく、現時点での（案）として以下のごとき事業を、会員各位のご協力を得て実施したいと考えています。

(1) 海事思想啓発事業

① 引き続き、ホームページの掲載内容の充実を図るとともに、SNS 等の機能を活用した、会員相互や、海事に興味を持つ一般市民との交流の場の設定を検討する等、ホームページの新しい機能の拡充。

② 機関誌「Ocean」の品質（体裁、内容とも）の向上。

(2) 海事意識教育事業

海事意識教育の目的で、例えば、以下に示すような大学内・外の種々の組織に働き掛け、「明治丸」、「百周年記念資料館」及び「明治丸記念館)」への来訪者を増やすことに協力したい。

① 「海事普及会」との協力関係の更なる発展を図る。

② 「海洋会越中島支部」活動への協力を強化し准員（在学生）への海洋会の活動 PR に協力すると同時に、当塾の PR も行い、会員勧誘に努める。

③ 「江戸前みなと塾」の活動への協力の可能性を探る

「江戸前みなと塾」は、品川ｷｬﾝﾊﾟｽの海洋科学部の魚類研究室が中心となり、ESD（Education for Sustainable Development）活動の一環として、港区芝浦港南総合事務所等と組んで毎年開催されている。 「明治丸」の一般公開を中心とする活動に関連して、少しでも越中島（海洋工学部）ｷｬﾝﾊﾟｽが、関与出来ないか、また、その橋渡し役を当塾が出来ないか、可能性を探求してみる。

④ 「大学周辺の学校」へのアプローチ

海洋大学の周辺には、小・中・高と各種学校が存在している。地域おこしの基本である、地域資源（重要文化財、有形文化財　等）の活用例として、社会科見学、或いは、理科部、科学部、天文部と言った部活の一環に、「明治丸」や「資料館」、「プラネタリウム」等を組み込んでもらえないか、教育委員会等に働き掛けを行いたい。

⑤　「公益社団法人日本海洋少年団連盟」（以下　海洋少年団）へのアプローチ

既に、海洋大学としては、カッターの係留場所を提供するなどの協力をしているが、当塾としては、手旗信号、カッター訓練、等の海洋少年団の定番となっている活動ではなく、更なる海事知識の普及に向け、「明治丸」や「資料館」、「プラネタリウム」等を活用した「海洋教室」を海洋少年団に提供する活動が有効と考え、実施したい。

⑥　近隣の「観光協会」等との協力関係の構築

「明治丸」他の大学が有する歴史的資源を有効に利用・活用し、「明治丸」の存在を世間一般にアッピールする手段としは有効であると考え、既に関係を構築した「江東区観光協会」を突破口として、出来れば隅田川対岸の中央区を含めた「観光協会」との協力関係の構築により来訪者を増やす努力をしたい。

(3) 利活用促進事業

①「日本盲人会連合」(視覚障害者の組織　加盟団体61団体　会員約　50,000人）との協同事業として、「明治丸」を教材にした「ブラインドツアー」の実施を検討する。

ソルティーフレンドの代表であり、当塾の一般会員でもある、高橋女史より、視覚障害者に、「船」の形等を理解してもらう為に、実船に「触るツアー」を実施したいとの提案あり、重要文化財「明治丸」を教材とした、社会貢献としての視覚障害者の為のツアーであり、案内人（ガイド）の事前講習などの手間はかかるが、長く続けられる事業として是非とも実現したい。

当塾としては、初めてのことでもあり、慎重な準備期間を考慮し、本年度は気候の良い秋に、２回程度（休館日に各回２０名+付き添い２０名程度）実施で計画したい。

②　「ザ・ロープ」（通称　ロープの会：　2015年に創立４０周年を迎えた、木製帆船模型製同好会　会員110名）　との関係強化を図りたい。

木製帆船模型界の由緒ある同好会で、毎年、製作した模型の展示会を行っており、3,000～4,000名の愛好家が、1週間の展示会に足を運ぶ程の盛況ぶりである。

当塾としては、「定例の展示会」の誘致は難しいとしても、できれば、特別展示等の企画に加えることを大学に提案し、帆船模型の展示企画への見学者を誘致し、同時に「明治丸」の存在を一層アピールすることにより、「明治丸」及び「資料館」を訪れる人数の増加が期待できるものと考える。

③　「明治丸海事ミュージアム」との協力関係強化

上記 ①、② 記載の外部団体とのコラボは、「明治丸」及び「百周年記念資料館」等の明治丸海事ミュージアム所属の施設を利用・活用するものであ

り、明治丸海事ミュージアムとの協力関係が、不可欠である。更に、明治丸海事ミュージアムが独自に立案する、「明治丸」、「百周年記念資料館」を中心とした企画展などについては、要望に応じて協力することも、また、言を俟たない。

今後は、「百周年記念資料館」内の展示物について、現在の、「動かない、動かせない」資料から、出来る限り「動かせる、動く」資料への転換を図り、魅力ある資料館に変身する工夫を提案し、実現していきたい。

ライトアップの実施については、適時に提案し当塾が請負い、実施すべく、引き続き提案していきたい。

(4) 整備保全事業

「補償工事」により問題個所の修復が終わった「明治丸」の、船体の保全、維持、管理に関しては、修復業者の手を離れ、今後は総て、重要文化財所有者としての大学の手に委ねられることとなり、大学は、日々変化していく船体の状況を点検し、適切な処置を講ずる必要がある。

今年度は、平成２７年度実施の保守業務のみではなく、「明治丸」全般の保全、維持・管理、利用・活用、についての協力度合いを一層深めるべく、大学側と協議していくこととする。

(5) 物品販売事業（利活用促進事業）

明治丸海事ミュージアムの利活用促進（PR）と、当塾の PR を兼ねた物品の販売事業は継続することとし、取り敢えずは、好評の缶バッジの「明治丸 Series2 & 3」を、海王祭を目途に新しく追加販売する計画で、既に準備している。

その他にも適当な物があれば適時追加を検討する。

満船飾（2015.05.22.）

明治丸　ライトアップ（2015.12.21）

§自然環境を考えながら海と山に親しもう§　　正会員　北沢昌永

海から、山からそして空から痛切な悲鳴が聞こえてくる。
土壌侵食、砂漠化、地下水汚染、原油汚染、地球温暖化、海面上昇、オゾン層破壊、酸性雨などによって地球は間違いなく病んでいる。
こういった地球自然環境の変動に対してどのように対応すべきであろうか?

さきに行なわれた国際会議ＣＯＰ１５においても世界各国の相互理解と統一方針の策定は極めて難しい情況であったことが浮き彫りになった。
あまりにも広範で、 複雑であるこうした問題への決定的対処は人間がついに究極の情況に追い詰められるまで出来ないのであろうかという悲観論が暗く世を覆ってきているようだ。

地球環境間題に関わりを持っている主体は国家の他に多種多様な団体、 国連、ＥＵ, そしてＮＧＯ、ＮＰＯ、などの市民連動がある。これらが地球環境間題の解決にどのような役割を担い、 実行すべきかが問われている。

しかしながら、抽象的一般論を語るだけでは何らの結果も生まない。したがって、地球上の人間はごく身近な事象に正対し、 考え、 自然環境の破壊防止のために
現実に行動することが重要であろう。

環境破壊の主因が人の経済活動であり、ついで人間の生活態様が副因あることは明白である。
だが、 そこには一般小市民が果たせる役割も限定的ながら存在し、
それらの結集がやがて大きな成果をもたらすことも期待されている。

そこで、人間生活における副次的なもの、趣味、レジャー等が引き起こす環境破壊について考えてみよう。

海、海浜等に関しては海洋汚染防止法等の公的規制があるが、海浜での水泳、サーフィン、ダイビング、小船艇のクルージングまでには必ずしも及んでいない。彼らが引き起こす海岸汚染に対し地方自治体、ＮＰＯなどの善意の活動も追い付いていない情況である。 あとからあとから散乱しているゴミの前に如何にも無力である。
いくつかのボランティア団体がやっているビーチクリーンアップ活動が海浜でレジャーを楽しむ人々の意識を啓発し、 特別な清掃活動が不要になることが肝要だ。
欧米のビーチの多くがゴミひとつない美しさと、 清潔に保たれているのを羨ましく思ったことがある

山も登山の大衆化に伴って今や深刻な環境破壊が進んでいる。 安直な趣味登山、
商業主義宣伝に踊らされてラッシュする人々による山岳のオーバーユースがある。

狭い山道を群れをなして移動する人々、路傍の草木を踏み潰し、路肩の土砂を崩して歩き、ゴミを撒き散らして、 大声でわめきながら。 彼らは自分がいかに山の静寂を乱し、自然を痛め付けているかを自覚していない。

１００名山、２００名山、そして３００名山に挑戦し、踏破したと、誇らしげに語る多くの山人

を知っている。

｛おめでとう｝　　人間ある目的に向かってまっしぐらに進み、 達成する事は確かに立派だ。 大いに祝福したい。

だが、少しばかり山歩きをやっている私は君に問いたい。
君は山道を踏み外して歩き、 小さな植物を少しも踏み痛めませんでしたか? 木の小枝を少しも折らなかったですか?
タバコの吸い殻や、 飴の包み紙を歩きながら落としませんでしたか?
休憩時に草原を踏み荒らさなかったですか?

高山植物の花畑に入り込んで眺めたり、 写真を撮ったりしませんでしたか? 飲食の後の雑物を始末して全部もちかえりましたか?
携帯ラジオを鳴らしながら歩いたり、 犬を連れて歩いたりしませんでしたか?

「山では何もとるな。写真を撮るほかは」「山では何も残すな。足跡のほかは」
私は誰もが当然守るべき山の基本的マナーについて言っています。
昔、 サー・ウオルター・ウエストンを今の日本アルプスの山々に案内した上条嘉門次は言っている。「山は猫のように歩け、石ひとつおとすな」と。静かに山を痛めないようにという意味だ。

最近の登山の大衆化に伴って山の自然が荒らされ、傷つけられている現実が嘆かれている。 商業主義宣伝に踊らされた0 0名山ハンテイングがどの位山の自然を泣かせているかを知るべきである。
数多くの山を不遜にも挑戦踏破するよりも静かな山を四季ごとにそっと愛でながら登るという選択をしている多くの人もいる。
元来１００名山は故深田久弥氏が自ら登った多くの山の中から選びその美しさと山への愛を語ったものであり、 今や彼の真の心と遠くかけ離れてしまったとさえ思われてならない。

私は小さな山歩きのグループの仲間とまたは単独で年に数回山歩きを楽しんでいる。 その時には必ずポリ袋を持って捨てられているゴミを拾つて持ち下っている。 山麓にゴミ箱や処理場があればそこに置かせてもらうが、そうでないときには自宅まで持ち帰っている。

著名なアルピニストの野口健氏がヒマラヤや富士山などでの清掃活動が評価されている。何も取り立てて宣伝するような事ではないが、なかなか出来ないことだ。
富士山が世界自然遺産になかなか指定登録されなかった理由のひとつが何かを知っていますか？
山に向かう人々に問いたい。

海との関わりで生きている者の多くは山への憧憬が強いようだ。海のように大らかな山の自然が心を引き付けるからであろう。

海と山を人間の親しい友として永く付き合いたいものである。

北沢　昌永
（日本出岳会会員　環境社エコ人間）

§明治丸のお皿（その 2）§　　正会員　佐藤勝二郎

明治丸で使われていたお皿のレプリカが、明治丸の観覧記念品として東京海洋大学の越中島キャンパスの、明治丸ボランティアガイドにより販売されていることと、お皿の来歴を前号「Ocean3号」で紹介したところである。

この、明治丸で使われていたオリジナルのお皿が、東京海洋大学越中島キャンパスの百周年記念資料館以外のところにも、保存されていることがあまり知られていないので、紹介したい。

百周年記念資料館に掲示してある絵画「明治丸」および「大成丸荒天航海絵」を描いた画家・飯塚羚児の「画廊」が、神奈川県大和市にあるとの話を先輩・吉田卓也先生から聞いていたので、平成 27 年 4 月 10 日に箱根からの帰途に訪問した。

その画廊は大和駅の近くにあり、えんじ色の三階建ての小さなビルで、その外壁に「花の画房」と書いてあり、入り口にはもう一つの看板が掛かっており「飯塚羚児資料室」と書かれている。

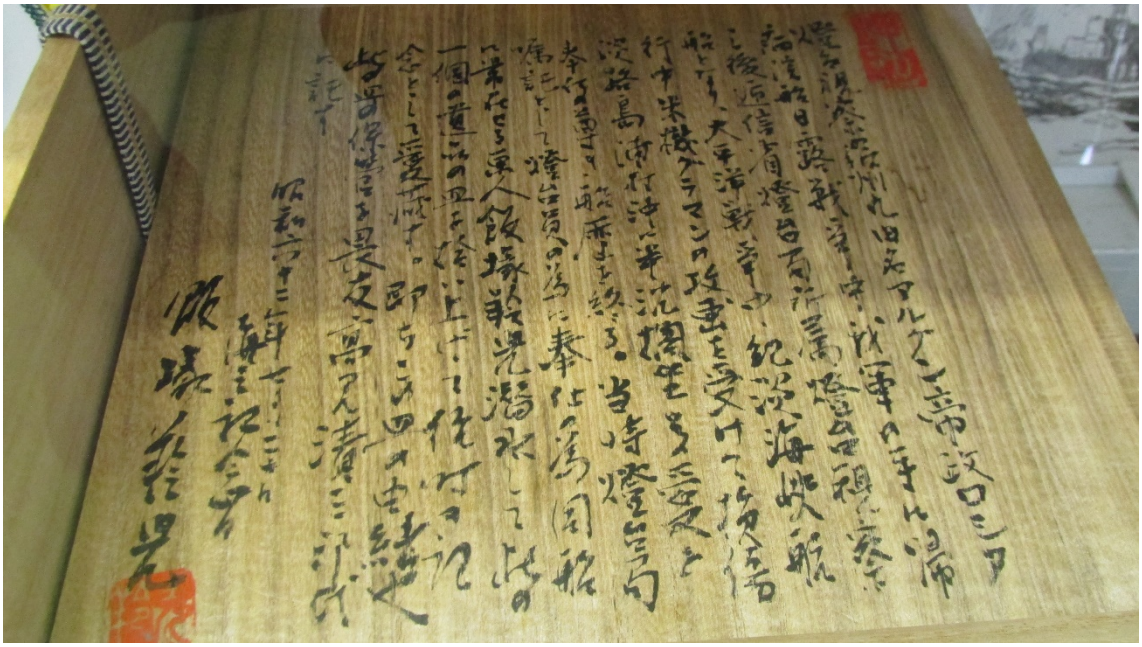
画廊では、手芸作品の展示会が行われていたが、そこにおられた画廊の主と思われる御婦人に来意を告げ「飯塚羚児資料室」の展示品の「絵画等」を見せていただき、展示品に関するお話を伺った。

ここで「絵画等」と表現したのは、この画廊に、なんと明治丸のお皿とナイフやフォークがショーケースの中に展示されていたからである。

なぜこんなところに、百周年記念資料館で保管しているお皿と同じものがあるのか、驚きと

疑問が生じた。

その、お皿の箱書には、入手した経緯が記されており、疑問は解決したが、画人・飯塚玲児と明治丸の因縁関係を不思議に思うのである。



印

燈台視察羅州丸旧名アルグン帝政ロシア
病院船日露戦争中我軍の手に帰
し後逓信省燈台局所属燈台視察
船となり、太平洋戦争中紀淡海峡航
行中米機グラマンの攻撃を受けて損傷
淡路島浦村沖に半沈擱座す。愛と
奉仕の尊き船歴を終わる。当時燈台局
嘱託として燈台員の為に奉仕の為同船
に常在せる画人飯塚羚児潜水して此の
一個の遺品の皿を拾い上げて往時の記
念として愛蔵す。即ちこの皿の由緒や
此の皿の保管を畏友高見清三郎氏
に託す

昭和六十二年七月二十日

海之記念日

飯塚羚児　印

明治丸のお皿の隣には、宮中晩餐会で下賜された盃が明治丸関連品として展示されているが、いかなる関連事情があったのかは、更なる調査が必要である。
明治丸の後継船である「羅州丸」も戦争に翻弄されたドラマを秘めた船であるが、別の機会に紹介したい。

飯塚羚児資料室と東京海洋大学の百周年記念資料館に保管されている「明治丸のお皿」は、共にピンチを心ある人に救われて、今日見ることが出来るのであって、まさに『幸運の皿』と謂えるのではないかと思う。

画人・飯塚羚児は怪物[註1]であり、とても小生がごとき浅学の者が紹介できる人物ではないので余人に譲るものである。

なお、平成 27 年 11 月 20 日に、再び「花の画房」を訪ねる機会があり、飯塚羚児所縁の方々にお目に掛かり、以前より詳しいお話を聞くことが出来た。
収蔵品の殆どが、東京・九段にある「昭和館」[註2]に移管されることになるとのことで、貴重な品々が散逸を免れることになりそうで安堵している。

註 1　怪物
飯塚羚児画伯は、平成 16 年に 99 歳で没、出版された評伝の副題が「怪物画人」

註 2　昭和館
国立博物館（厚生労働省社会・援護局所管）である。いわゆる戦中、戦後の国民生活を中心とした資料を展示している。1999 年（平成 11 年）3 月 27 日開館

§ふるさと青森と明治丸§　　正会員　髙杉洋一

聖徳公園

私のふるさと青森市の港の一角に、聖徳公園という明治天皇ゆかりの公園があります。

明治天皇は、青森港を三度ご利用になっておられます。最初が「海の日」の起源となる明治 9 年（1876 年）7 月 16 日明治丸にご乗船函館へ、2 度目が明治 14 年（1881 年）8 月 29 日「扶桑」にご乗艦函館へ、3 度目が同年 9 月 7 日「迅鯨」で函館からご到着。公園はこれらご乗船ご到着を記念して建設されたものです。

この公園は昭和 5 年に当時の海岸沿いに設置されたものですが、その後、港の拡張、道路の建設に伴って 2 度移転を余儀なくされ現在に至っています。したがって園内に公園の由来を記した碑や銘板が 3 基あります。現在の公園の銘板（1996 年）、最初の移転時（1968 年）そして建設当時（1930 年）。

公園の中心的存在が「明治天皇御渡海記念碑」（以下「記念碑」という。）です。高さ６メートルほどの四面体で実に堂々たる佇まいの石造の碑です。

聖徳公園移転の経緯（Yahoo 地図に作図）

「記念碑」は公園の南東角にある

１．公園の由来

多少説明が重複しますが、過去の経緯が分かりやすいと思いますので、新しい説明文から順に紹介します。

(1)現在の公園の銘板

観光案内用であり日本語（横書き）の他に、英語、韓国語、中国語で書かれています。

聖徳公園
聖徳公園は明治天皇と青森市の深い関係を記念し、昭和 5 年（1930 年）、市内官民の協力によって浜町桟橋の西隣に着工、翌年市へ移管され開園した。天皇は明治 9 年(1876)と 14 年(1881)に、東北・北海道へ巡幸する際、青森の浜町桟橋を利用した。その後、公園は昭和 12 年（1937）に文部省から史跡指定され、青森市の名勝の一つとなった。 昭和 43 年（1968）、青森港の拡張と臨港線の敷設に伴い、聖徳公園は規模を大幅に縮小し、場所も青森税関支署の跡地へと移転した。しかし、ベイブリッジの建設に伴う道路拡張で、平成 8 年（1996）に現在地へと移された。

(2) 最初の移転時（1968 年）

私が初めて聖徳公園の存在を知ったのは大人になってから、公園がここへ移った後でした。生家から離れた所だったせいもあると思いますが、戦後学校教育の影響もあったかも知れません。先日昭和 30 年頃の青森市の地図「私たちの町青森市（昭和 30 年頃／青森市小学校社会科研究会編）」を見る機会があったのですが、この公園の記載はありませんでした。

下欄は移転時に由来を記した石碑。縦書きで句読点ナシ。青森桟橋は (1) の浜町桟橋のこと。

聖徳公園の由来

この公園は昭和五年八月明治天皇御巡幸御渡海記念碑建設会によって建設され完成と同時に青森市にその一切を寄附されたものであります市は昭和六年七月明治天皇ゆかりの地としてその史跡保存の目的から名称を聖徳公園として一般に公開してきましたこの地先はかって青森桟橋のあったところであり明治天皇が明治九年七月同十四年八月および九月の三回奥羽北海道巡幸の際この地より御乗船御上陸された由緒の深いところでありまた青森港の昔を後世に伝え物語るに足る思い出の深いところでもあります青森開港以来三百四十有余年沖荷役時代からいまは海辺が埋立てられ臨海地区の整備港湾施設の拡充によって大型船舶の接岸荷役に替わり港勢の発展隆昌は昔日の比ではありませんいままた臨港鉄道線路を敷設するの必要にせまられ記念碑等の施設を再び移転するの余儀なきに至りましたここに市民の思い出深い聖徳公園をこの地に移し再現をはかり遠く明治の時世をしのびかつありし日の青森港の海岸線を永遠に記念しあわせて港勢のますます盛んならんことを希念するものであります

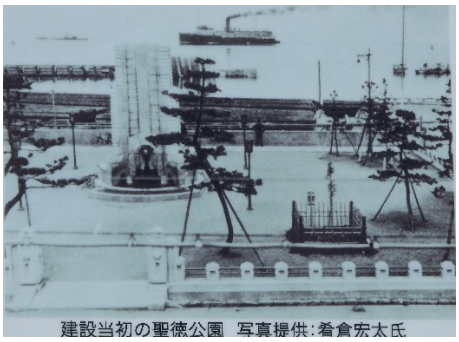
昭和四十三年七月

青　森　市

昭和 43 年（1968 年）移転した頃
（園内観光案内銘板から）

「聖徳公園の由来」の石碑
（この石碑も現在の園内にある）

(3) 建設当時（1930 年）



昭和 5 年建設当初
（園内観光案内銘板から）

「記念碑」裏側の銘板

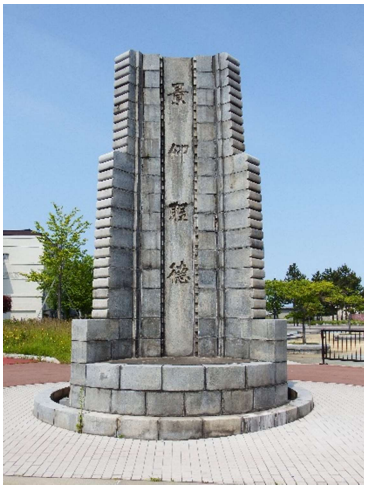
記念碑の裏側に公園の由来が刻まれています。その全文を紹介します。縦書きで文中に句読点はなく文字がびっしり詰まっていますが、「天皇」、「今上天皇」の前だけ 2 か所に余白があります。天皇に対して敬意を表しているのでしょうか。

明治維新ノ鴻業成ルヤ　天皇ハ全國御巡幸ヲ思召立チ給ヒ我ガ青森縣ニハ明治九年七月同十四年八月及九月ノ三回鳳輦ヲ駐メ給ヒキ嗚呼東奥外濱ノ民親シク龍顔ヲ拝スルコトヲ得シハ洵ニ開闢以来ノ事ニシテ亦聖代ノ餘澤ト謂フベシ殊ニ此ノ埠頭ハ當時二回御乗船且一回御上陸アラセラレシ所ナリ後年コノ聖蹟ノ堙滅センコトヲ憂ヒ　今上天皇御即位記念トシテ茲ニ議起リ今年ハ九月ノ御上陸ヨリ恰五十年ニ當ルヲ以テ其ノ完成ヲ期セリ事聞ユルヤ官民翕然トシテ之ニ賛シ特ニ閑院宮殿下ハ畏クモ御題字ヲ賜ヒ東郷元帥一戸大将亦各揮毫ノ勞ヲ取ラル今ヤ工ヲ竣フ乃其ノ来由ヲ記シ以テ永ク後世ニ傳フ

昭和五年十一月三日

元皇子傅育官

弘前高等学校教授　弥冨破魔雄　謹撰書



正面（東向き）　題字「景仰聖徳」

左側（南向き）　明治 14 年の記録

右側（北向き）　明治 9 年の記録

記念碑の正面の題字は「景仰聖徳」ですが、一般には「明治天皇御渡海記念碑」と呼ばれています。

記念碑の右側（北向き）が明治 9 年明治丸の記録。

「明治九年七月十六日此埠頭ヨリ明治丸ニ乗御函館ヘ御渡海遊バサル

元帥海軍大将伯爵東郷平八郎謹書」

左側（南向き）が明治 14 年の記録です。

「明治十四年八月二十九日此埠頭ヨリ扶桑艦ニ乗御同九月七日函館ヨリ迅鯨艦ニテ著御御上陸在ラセラル　陸軍大将一戸兵衛謹書」

２．公園内のその他の史跡

園内にはほかに皇室関係の記念碑や海の記念日に関する碑などがあります。

・明治天皇青森御乗船並御上陸桟橋跡　史跡標柱　昭和 12 年 10 月建設

・皇太子殿下御降誕記念碑　昭和 9 年 9 月 12 日建立

・明治天皇御渡海記念塔　昭和 17 年 8 月建立（皇紀 2600 年を記念したもの）

・海の記念日発祥の地碑　平成 2 年 7 月 16 日建立
「発祥の地」よりも「ゆかりの地」程度が適切ではないかと思うのですが....。
・明治丸主錨原形複製及び同設置碑　平成 2 年 7 月 16 日建立
設置碑の説明文を紹介します。

明治九年七月十六日、明治天皇東北ご巡幸の帰途明治丸で青森港を出航、函館を経由横浜港に安着される。 ときに七月二十日――――――。昭和十六年、この日を海の記念日と定める。 このたび、海の記念日五十回を記念して東京商船大学のご好意により明治丸の主錨を複製し、海の記念日発祥の地であるこの地に展示し、その由来を後世に伝えるものである。 平成二年七月十六日 青森港管理事務所 青森港振興協会

明治丸の錨は本船船首と百周年記念資料館前の 2 か所にありますが、この複製の原形はストックの形状から同資料館前のものであることが分かります。

聖徳公園（青森市）

百周年記念資料館前

聖徳公園　明治丸錨　碑文

明治丸船首側

以　上

§山尾庸三と聾唖学校§　　正会員　澤間譲治

６月１６日、『筑波大学付属聾学校』の卒業生９人が明治丸の見学にいらっしゃいました。訳を尋ねると『創立１２５周年の記念誌』に明治丸の写真と其の事跡を掲載する為に訪ねて来られたとの事であった。『聾学校』と『明治丸』が何故に結びつくのか？一瞬考えたが、以前観た映画『長州ファイブ』でのネピア造船所の場面を思い出して、得心した。その映画では、ネピア造船所で働く聾唖者が手話を使って会話している場面に遭遇した山尾庸三が痛く感激し、自らもその手話を学び、日本で最初の聾唖学校の設立を実現した事を紹介していたからだ。

この日明治丸の見学にいらした筑波大学付属聾学校ＯＢの方々にとって、山尾庸三と言う人物は尊敬すべき大の恩人だった訳で、その山尾庸三が明治維新政府に建造の建議をして完成された『明治丸』はＯＢの方々にとっても重要なモニュメントだった訳だ。

私自身、恥ずかしながら山尾庸三なる人物が如何なる人物であったかは、映画を通してしか知らない事に気付いたので、当該投稿を機会に少々その事跡を手元の資料を基に纏めておこうと考え、此処に何回かに分けて記す事にした。

【山尾庸三　藩士の頃】

庸三は、天保８年（１８３７年）１０月８日、父忠治郎、母末子の３男として、周防国吉敷郡二島村（山口市秋穂二島）長浜に生まれた。幼名は「富士太郎」と言った。

父は、城下町萩に住む長州藩士繁澤家の給領地（藩から与えられた土地）を管理する庄屋で、繁澤家から大きな信頼を得ていた。

７歳の頃、読み書きを習うため庸三は、自宅から約３里（１２㎞）離れた小郡（山口市）にある寺子屋に通った。１０歳の時には、その才能を認められ、小郡宰判（役所）の手小（従者）の役に就いた。嘉永２年（１８４９）、父忠治郎の真面目な働きに対し、繁澤家は、１３歳の庸三を奉公として迎え入れた。この奉公が庸三の出世のきっかけになった。

安政３年（１８５６）、父の奨めで、徳山（周南市）の長州藩士から歴史、漢詩、書を学んでいた庸三は、江戸へ出て学問を学びたいと考えるようになった。

そして２０歳の夏、富海（防府市）から船で大阪へ行き、大阪からは東海道を通って江戸へ向かった。庸三はこの時初めて長州から外へ出た事になる。

江戸に着いた庸三は、江戸の三大道場のひとつである練兵館を訪ねた。この道場は、斎藤弥九郎が指導するもので、長州藩士桂小五郎（後の木戸孝允）が塾頭を務めていた。庸三が道場を訪ねた時、小五郎は幕府の命令で相州（神奈川県）の沿岸警備に出ていたが、入塾を許された庸三を見て『弟が出来た』と言って喜んだと伝えられる。この小五郎との出会いが、庸三にとって人生の転機となった。庸三は練兵館で武術を、他の塾では洋式の兵学を学んだ。父はその学費を、隣村の知り合いに送金を頼み、その息子から庸三に手渡された。この時、学費を届けたその隣村の知り合いの息子とは、靖国神社に

も大きな銅像がある大村益次郎だった。人の縁とは不思議なものです。続編は次号に譲る事として、英国留学までの年譜を下記に掲げる。

英国留学までの山尾庸三の足跡で目に留まるのは、２６歳の時『英国公使館焼き討ち』に加わっている事だ。矮小化された現代の価値観ではとても褒められた所業とは言えないと言う意見が多数だと思うが、天下国家に偉大なる足跡を残す人材の若き日を眺める時『この様な血気盛んな精神』を発見するのも又歴史的事実ではあるまいか？

山尾庸三の生涯（英国留学迄）

和暦	西暦	歳	出来事
天保8年	1837	1	10月8日周防国吉敷郡二島村長浜（山口市）に生まれる
天保14年	1843	7	この頃、寺子屋に通う
弘化3年	1846	10	この頃役所で手伝いをする
安政3年	1856	20	6月江戸に行き練兵館道場に入門。桂小五郎と出会う
文久元年	1861	25	4月函館に行き、幕府船亀田丸に乗組みロシア領沿海州へ航海する
文久2年	1862	26	8月長州藩船壬戌丸に井上馨、遠藤謹助らと乗組む 12月品川御殿山に建設中の英国公使館焼き討ちに加わる
文久3年	1863	27	5月12日英国へ密留学のため横浜を発つ 9月20頃ロンドンに着く。ウィリアムソン教授に就いてユニバーシティ・カレッジで学ぶ
慶応2年	1866	30	秋　グラスゴーのネビア造船所で工業技術を学ぶ

当時の実写真

映画『長州ファイブ』のポスター

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp